



◆自立支援の視点で、支援を続けたい



コープこうべ 生活文化・福祉部 課長 鮎沢 慎二氏

(私は) 4 回目の被災地入りになりましたが、来るたびに様子が変わっています。復旧のスピードが遅いように感じますが、膨大な範囲を津波が襲ったのですから、がれきの問題 1 つをとっても阪神・淡路大震災のときと同じというわけにはいかないでしょう。

被災経験をもつ生協とし、何が出来るかを常に考えています。

たとえば、コープこうべの組合員に呼びかけて手作り品の材料を集めて送り、仮設住宅にお住まいの高齢者の皆さんに作っていただき、それにコープこうべが工賃を乗せて買い上げて組合員に販売する仕組みなども考えられます。

自立支援の視点を常に持ちながら、被災者の目線に立ち、規模は小さくてもできることを、息長く続けたいと考えています。

同じ被災地として、継続支援を約束

～コープこうべ「地区交流先遣隊」の活動～



気仙沼・鹿折仮設住宅を訪れたコープこうべの皆さんと鹿折中・校庭仮設住宅自治会長の小野寺良男さん（前列中央）。

11月1日、コープこうべの役職員や組合員の計39人が「地区交流先遣隊」として宮城県内の被災地に入り、みやぎ生協の各ボランティアセンター（県北・仙南・仙台・石巻）が主催する、学習会やふれあい喫茶に参加しました。「地区交流先遣隊」とは、今後、被災地への継続的な支援を行なうにあたって何が出来るかを、現地の方との交流を通して考える、コープこうべの取り組みです。

県北ボランティアセンターでは、気仙沼市・鹿折中学校グラウンドの仮設住宅を訪れ、「冬を暖かく過ごすための学習会」や「ふれあい喫茶」などを実施。その後、いまだにがれきが大量に残る市内を視察しました。

前日に神戸を発ち、バスに13時間揺られて宮城に入った参加者は、当日も仙台からバスで約3時間の移動がありましたが、疲れた表情も見せず、バスを降りてから会場までの坂道を歩いていました。

学習会では、断熱シートやすきまテープの有効活用方法など、冬を暖かく過ごすためのさまざまなヒントが紹介され、その後行なわれたふれあい喫茶では、被災時の体験などに耳を傾けながら言葉を交わし、コープこうべ組合員手作りの手編みのひざかけや靴下が手渡されました。



コープこうべ・秦正雄常務理事。

神戸の経験を宮城の発展の力に

活動終了後には全員が仙台に集合、18時から夕食を兼ねた、みやぎ生協役職員との交流会が行なわれました。コープこうべの秦正雄常務理事は「今回は短い交流でしたが、これからも続けたいと思います。同じ被災地として、神戸の経験が今後の宮城の発展の力になればと願っています」とあいさつしました。